



125 周年記念会 アルバム







二日目





懇親会





パンデミック下の世界で

佐佐木頼綱

一二五周年記念会を無事に終えることができました。ご参加くださった皆様、運営に向けて動いてくださった皆様、ご寄付をお寄せくださった皆様、関わってくださいました全ての皆様に感謝いたします。誠にありがとうございました。数年ぶりの再会を楽しみに皆さんの笑顔を見て、感無量でした。そして短歌が座の文芸である事を再確認しました。

世界パンデミック下での記念会の準備と開催となりました。パソコンを開くと、開催準備を始めた2年前のメールが出てきます。この頃は東京都の感染防止条例が出始めた時期で、イベント開催には様々な制限がかかっていました。見積もりを取ったホテルからもメールには「2mの間隔を開けた着席、50名以下での開催」

「2時間以下、会終了後は即時解散」
「司会以外の私語は禁止、催しは壇上での

映像上演のみ可」

「都県境を越えての参加は不可」

などなど、問い合わせた時期ごとに様々な条件が記されています。編集部でも実行委員会でも大掛かりなものは無理であろうと判断し、「東京歌会にオンライン配信などを加えた拡大版」を開催しようと動いていました。それが開催まで一年を切ったあたりで徐々に東京都からの規制が下がり、できることを模索し、組み合わせでいった結果、今回のような一二五周年にふさわしいにぎやかで華やかな記念会とする事ができました。

関東大震災の二ヶ月後に出された「心の花」大震災號には石樽千亦の挨拶文が載っています。そこには

「祖父の代から残つてゐた土蔵を始め、父が建てた私があるべき筈がありませんでした。他のものとはかく三百號を重ねた『心の

花』の合本のみでも残したいと思ひ、それと『心の花叢書』と、先年銀婚式の折皆様から戴いた短冊帖とをば、大切に持ち出し（中略）着のみ着のまゝ火の子の海をくぐりぬけました（後略）」とあります。初めて読んだ際千亦の心境がよく理解ができませんでした。しかしパンデミックの世で歌会準備に奔走した今、千亦をつき動かしたつなごうとする気持ちや、歌に長く身をおくなかで形成された彼の必然がわかるようにも思います。

準備期間の関係で今年は全国大会を開催しません。二〇二五年からは地方、東京、地方と全国大会を行う予定です。そして、二〇二八年には創刊一三〇年記念大会を東京で開催する計画を立てています。一二五年の縦軸を引き継ぎながら、時代の横軸も大切にしながら、一二六年目への一步を踏み出しましょう。

記念会の記録 一日目

倉石理恵

「心の花」が創刊（一八九八年）されてから一二五年、本誌は通巻一五〇〇号を発行することとなった今年、コロナ禍での休止期間を経て四年ぶりに全国規模の記念会を開催することとなった。記念会の企画立ち上げ時にはまだコロナ感染予防に関する多くの制約があり小規模の記念会の予定で準備を始めた。過去の記念会や全国大会で利用していたホテル等の会場は発生するキャンセル料の負担が大きいため、公共の施設や民間の会議室を利用する「シンプルな会」が今回のコンセプトのひとつになった。五月、コロナに関する規制が緩和されたことにより記念会の規模も内容も変更して開催に向けて再スタートを切ることとなった。

果たして何人の方が来てくださるのだろうか？多くても一五〇人位だろうか？詠草締切りの八月末が待ち遠しくまた不安を抱えながらその時を待ったが、集計された詠

草数を知り歓喜の声をあげてしまった。また同時に新たな不安が生まれた。どうやら参加者のみなさまを気持ちよくお迎えできるだろうか。会場レイアウト図を作成して実行委員会の会場設営係と何度も打ち合わせを行った。というのも貸会議室は利用者が申請するレイアウトに従って椅子や机の設置をするので十分な資料を作成する必要があったからだ。その後も係ごとに案件をひとつずつ確認しながらZoomや対面で開催直前まで打ち合わせを重ねた。

十一月十一日、スタッフ集合は十一時。係ごとに手際よく準備が進められて参加者のみなさまを待ちこがす。いよいよ開会だ。佐佐木幸綱先生からは「四年ぶりの大会になります。変わった会場ですが制限の中でも充実した二日間を過ごせればいいと思います。いい思い出が持てる充実した会にぜひご協力いただきたい」と開会の辞をいただき、森朝男先生の「和歌と短歌」のご講演へと移る。万葉集、日本書紀などの古典から引用された資料をもとに、時に笑いを誘いながらのお話は五十分という短い時間ながら充実したものであった。

続いての座談会は佐佐木頼綱さん、大口

玲子さん、佐佐木定綱さん、駒田晶子さんの三首選資料をもとに俵万智さんの丁寧な司会で進められた。佐佐木頼綱さんは信綱の視点に着目し「愛でる心、日常の中にささやかな幸せを見つけて短歌を詠む、結社の理想の形」と話された。（三首選より）

・花さきみのらむは知らずいつくしみ猶もちいつく夢の木実を 佐佐木信綱『老松』
休憩を挟み「心の花賞」群衆賞の授賞式へ進む。「心の花賞」受賞者の久永草太さんが「今は右のお腹は痛くありません」と話すと大きな拍手と暖かな笑いが包んだ。

最後は写真撮影。一七〇名弱の方々にどうやって並んでいたか？準備の中でも最も苦心したところだったが参加者のみなさまと会場設営係写真係との見事な連携で素早く終了した。ご協力くださったみなさまどうもありがとうございました。

手探りで準備を進めた記念会の開催は「心の花」の大きな会に初めて参加するスタッフも多かった。はじめて尽くしの記念会に行き届かない所があった事と思います。この場をお借りしてお詫び申し上げます。またご参加くださった全てのみなさまに感謝申し上げます。ありがとうございました。

記念会の記録二日目

武藤義哉

記念会の二日目、朝方は雨模様。用意してあった傘用のビニール袋が役に立つ。

二日目は歌会で、題は「飛」。三部に分かれ、それぞれの部の評者は、①黒岩剛仁さん・斎藤佐知子さん、②佐佐木朋子さん・晋樹隆彦さん、③谷岡亜紀さん・本田一弘さんである。また、伊藤一彦先生が歌会の司会及び各部の最後でのコメント。

歌会から様々な視点が拾えるが、歌の中での作者の立場、という問題が一つあった。
・放課後のチャイムが風に乘って飛び駄菓子子屋さんの気合いを入れる 大谷ゆかり
朋子さんは、面白い歌だが、作者がどこにいるか、駄菓子屋なのか、学校なのか分からないとコメント。これについて伊藤先生は、作者との関連性についてはなるほどと思う、しかし歌としては、「駄菓子屋さんの気合いを入れる」のところなど面白い、と評。次の歌も作者の立場に関わる。
・ほんの少しつついて乱しておきました飛

飛行機雲のしっぽのあたり 福永 昭子

谷岡さんは、しゃれたユーモアの歌だが、作者がどういう立場で詠っているか。ウルトラマンの立場とかなら面白いが、ただのイマジネーションなら、この歌を読んでも私の人生は変わらないと辛口の評。

比喩についてのやりとりもあった。
・ 壮大な伏線回収するように飛行機雲をさ
らう秋風 片山佳代子

谷岡さんが「飛行機雲は（伏線のように）は）仕組まれていない、頭で作った歌。」と評したのに対し、伊藤先生は、（比喩が）合わないという批判はそのとおりだが、飛行機雲を伏線と言ったのは初めて見た、ユニークな比喩と評価。しかし谷岡さんは「そのあとに何かがあるはずだけど、それがなかった。」と、引き続き厳しかった。

評者の得意分野にはまり、題ではないが、飛んで火にいる夏の虫（？）の歌もあった。
・ シード校を倒しスタンドに飛び跳ねる応援団に我も混じりて 桜井 仁

黒岩さんは、「私は野球小僧だったが、『シード校を倒し』は、応援団が倒したわけではない。」とツツコミ、笑いが。
・ あと三〇〇、六馬身差を詰める抜くミツ

クスフアアが飛び込む ゴール 森 祐希子

晋樹さんは、「これは馬を始めて間もない人の歌だ。私のようにキヤリア四十、五十年ではない。そのままの歌なので。」と、この言葉にも会場に大きな笑いが起きた。

以下、得票数一位、二位、三位（三位は二首が同数）の歌を順に。

・ その度に律儀に立ちて口開く飛び出す絵本のティラノサウルス 武藤 義哉
・ 一つずつ記憶の窓を閉じてゆく母は時間の境目を飛ぶ 武田ますみ

・ 黙祷の鎮まりの中飛び立ちし鳩ら自づと旋回に入る 加利川友子
・ 目に見えぬ風のかたちに椋鳥が群れなし飛べり空かたむけて 服部 秀星

佐佐木幸綱賞、伊藤一彦賞の歌を順に。
・ あを空へ散りゆく少年兵おもふ八月の記事に「犠飛」を見るたび 松元 雅子
・ 処女飛行初めて使う飛翔筋午前十時に蜻蛉となりて 矢代 朝子

歌会終了後は懇親会。ここではクイズも行われ、十二問全問正解は原口嘉代子さん。（少しして、幸綱先生も全問正解だったことが判明、さすがと思う。）

大会に参加して

山口明子

一日目の最初のプログラムは、森朝男氏の講演「和歌と短歌」。なぜ枕詞が使われるようになったのか、枕詞にはどんな意味があるのか、など話された。その例として「そらみつ」は「神が大空を飛行して空から見た国、大和」として、「やまと」に係る枕詞になったのではないか、という説を披露した。今まで「空に満ちている国、大和」だと思っていた私は、とても斬新な説に大いに感動した。他にも、和歌は「神の言葉」のあとに「人間の言葉」を付けたものではないか、という説を話され、和歌の神話性や神秘的要素を感じ取ることができた。

その後の座談会「短歌の現在」では俵万智さんが、佐佐木信綱の歌「花さきみのらむは知らずいつくしみ猶もちいつく夢の木実を」に出てくる、「夢の木実」とは「歌を作る時間にも当てはまるのではないか」というすばらしい読みをされ、深く感動し

た。

二日目は、歌会の後、懇親会だった。そこで和歌や短歌に関するクイズが十二問出題された。難問ぞろいだったが、原口嘉代子さんが全問正解され一位だった。私は俵万智さんと同じ十問正解で三位となり、賞品の芋けんぴを頂いて、とても嬉しかった。以前幸綱先生が全国大会を開く意義として「一年に一回くらい人と会うことが大切なのでは」とおっしゃっていた。その言葉の意味を深く実感した二日間でした。スタッフの皆様、有難うございました。

片山佳代子

前日まで続いた夏日から一転、漸く秋の深まりを感じる朝だった。この日が来た。投票する一首を決めあげねたまま、一七九の「飛」を携えて私たちは東京へ飛んだ。揺れる飛行機、慣れぬ乗換え、そしてさやかな迷い道を経て辿りついた東新宿。たくさんの方々、まずは名札を見てからお顔を拝見し、会釈をかさねながら席に着

いた。いよいよ始まる。誌上ではとっくに顔見知りの方々と、こうしてリアルに同席できる夢が今、叶っている。投票のちもいくつもの「飛」が去来する会場で、森朝男先生の講話が始まった。穏和な語り口で古典和歌の扉が力強くひらかれていく。枕詞って、そうか、そうだったのか。古語や古典和歌への意識をあらたにするお話に引きこまれ、一時間は一瞬で過ぎた。

つづいて俵万智さん司会の座談会。大口玲子さん駒田晶子さんの、人間の生死をつぶさに捉える歌評に身近な人の命を思い、胸を熱くした。また地方から参加の私たちにとつて、頼定兄弟の対話は眩しく尊い光景であった。二日目歌会、選者の先生方の歌評が生で聴けた感動は言うまでもない。

一日目は久永草太さんが心の花賞、二日目記念歌会は松元雅子さんが佐佐木幸綱賞を受賞し表彰された。師弟関係にあるお二方は、宮崎歌会の名コンビである。拍手に万感の思いを込め、私たちは、再びさやかに迷いながら宮崎へ飛んだのだった。